

多様な学習成果の評価手法に関する研究

本研究は、平成25年度から平成27年度までの3か年にわたって、当センターと県立高等学校5校との共同で取り組んだ文部科学省の委託事業である「高等学校における多様な評価手法に関する研究」の継続研究として、所内で進めた。

3か年の研究の成果を学校へ普及・還元するために、国語、地理歴史、公民、数学、理科、英語の6教科において、教科指導の研修プログラムを開発し、併せて、主体的・協働的な学習活動とその到達度を測るパフォーマンス評価等を導入する際に参考となる小冊子を作成した。

<検索用キーワード> パフォーマンス評価 パフォーマンス課題 ルーブリック
アクティブ・ラーニング 指導と評価の一体化

研究協議会委員

| | |
|----------------|------------------|
| 総合教育センター教科研究室長 | 小崎 早苗(平成28年度) |
| 総合教育センター企画研修室長 | 河野 健治(平成28年度) |
| 総合教育センター研究指導主事 | 米津 利仁(平成28年度) |
| 総合教育センター研究指導主事 | 舟橋 陽一(平成28年度) |
| 総合教育センター研究指導主事 | 近藤 哲史(平成28年度主務者) |

1 はじめに

本研究は、平成25年度から平成27年度までの3か年にわたって、当センターと県立高等学校5校との共同で取り組んだ文部科学省の委託事業である「高等学校における多様な評価手法に関する研究」の継続研究として、所内で進めたものである。

中央教育審議会が取りまとめた「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）の60ページには以下のよう
に記されており、指導と評価の改善が喫緊の教育課題となっている。

- 学習評価は、学校における教育活動に関し、子供たちの学習状況を評価するものである。「子供たちにどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、子供たち自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには、この学習評価の在り方が極めて重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性を持った形で改善を進めることが求められる。
- 子供たちの学習状況を評価するために、教員は、個々の授業のねらいをどこまでどのように達成したかだけでなく、子供たち一人一人が、前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかどうかを捉えていくことが必要である。
- また、学習評価については、子供の学びの評価にとどまらず、「カリキュラム・マネジメント」の中で、教育課程や学習・指導方法の評価と結び付け、子供たちの学びに関わる学習評価の改善を、更に教育課程や学習・指導の改善に発展・展開させ、授業改善及び組織運営の改善に向けた学校教育全体のサイクルに位置付けていくことが必要である。

こうした課題を意識しながら、本研究では、どの学校でも評価手法の開発と授業改善に取り組むことができる方策について研究協議を行った。その具体的な方策について紹介する。

2 研究の目的

前年度まで実施していた「高等学校における多様な評価手法に関する研究」の成果を基に、教科指導の研修プログラムを開発するとともに、主体的・協働的な学習活動とその到達度を測るパフォーマンス評価等を導入する際に参考となる小冊子を作成する。

3 研究の方法

(1) 研究校における実践の考察

各研究校の実践研究のプロセスを明らかにし、どの学校でも評価手法の開発と授業改善に取り組むことができる方策を探る。

(2) 教科指導の研修プログラムの開発

総合教育センターで行っている初任者研修，専門研修，10年経験者研修の教科指導研修で活用するために、昨年度までの研究成果を生かした教科指導研修プログラムを開発する。

(3) 小冊子の作成

昨年度までの実践研究を踏まえ、パフォーマンス評価についての概略説明，実施上の留意事項，教科ごとの取組の流れなどをまとめた小冊子を作成する。

4 研究の内容

(1) 研究校における実践の考察

各研究校では、どの学校もおおよそ1学期に1回程度のパフォーマンス評価の実践を行った。当初は、パフォーマンス課題が生徒の実態に合っていなかったり、ルーブリックの記述が曖昧でうまく評価できなかったり、多くの課題が見つかった。改めて、多様な学習成果の評価の難しさを感じた。しかし、定期的に行う研究協議の中で、課題を洗い出し、改善策を見つけ、次の実践につなげていった。継続して取り組む中で、目指す生徒像や単元におけるパフォーマンス評価の位置付けが明確になり、平素の授業も含めて、単元全体における指導と評価の充実を図ることができた。

そこで、評価手法の開発と授業改善に取り組む手順として、次のアからオまでの活動を繰り返すことが重要であると分かった（資料1）。

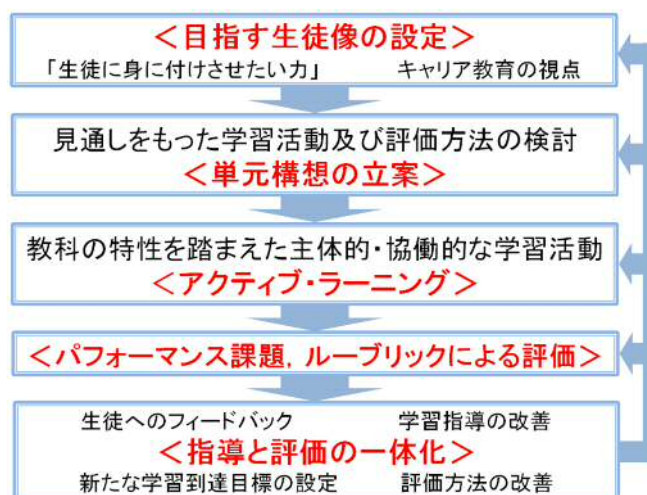
ア 目指す生徒像の設定

各教科において、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力，主体的行動力及びコミュニケーション能力の育成を主眼として、生徒の学びの現状を捉えた上で目指す生徒像をそれぞれ設定し、学習到達目標を「生徒に身に付けさせたい力」として具体的に掲げる。キャリア教育の視点も取り入れる。

イ 単元構想の立案

目指す生徒像の実現に向けて、教科の特性を

【資料1 教科指導におけるPDCAサイクル】



踏まえた学習活動及び評価方法を検討する。特に、主体的・協働的な学習活動を意識して単元構想を立てる。単元構想の段階で、学習活動の成果として「生徒が身に付けた力」を把握するために、パフォーマンス評価を計画する。

ウ 主体的・協働的な学習活動の導入

単元構想に基づき、主体的・協働的な学習活動を実践する。平素の授業においても常に主体的・協働的な学習活動であることを意識し、その集大成としてパフォーマンス課題を実施する。

エ パフォーマンス評価等の導入

パフォーマンス評価はパフォーマンス課題とルーブリックから成る。生徒は「パフォーマンス課題」に取り組み、可視化されたパフォーマンスを、教員が「ルーブリック」によって解釈する。また、学習成果の計画的な記録に基づくポートフォリオ評価を試みる。

オ 指導と評価の一体化

パフォーマンス評価をパフォーマンスの点数化(またはランク付け)のみで終わらせるのではなく、生徒へのフィードバックにより学習の指針を示したり、学習指導や評価方法の改善につなげたりする。

(2) 教科指導の研修プログラムの開発

10年経験者研修の教科指導研修(国語、地理歴史、公民、数学、理科、英語の6教科)で活用するために、昨年度までの研究成果を生かした教科指導の研修プログラムを開発した。ここでは、同プログラムを活用した数学の教科指導研修の流れを紹介する(資料2)。

【資料2 数学の教科指導研修の流れと研修で使った単元計画書】

数学(10年経験者研修):受講者32名

研修1日目
・講義「パフォーマンス評価と単元計画」
パフォーマンス評価とパフォーマンス評価を取り入れた単元計画の在り方の説明を行い、研修3日目の課題として、単元計画書の作成を指示する。

↓

研修3日目
・グループ協議「単元計画書を活用した単元設計」
科目、単元が同じグループに分かれ、単元計画書に基づき、どのように単元設計をしたか互いに説明する。その後、パフォーマンス課題やルーブリックなどの改善すべき点について協議する。

単元計画書

| | |
|------------------|---------------|
| 教科名(科目名) | 単位数 |
| 対象クラス | 教科担当者 |
| 単元名 | 単元の実施時期 |
| 単元目標 (学習指導要領) | |
| 1 生徒の実態と単元観 | |
| 2 評価規準 | |
| ①関心・意欲・態度 | ②数学的な見方や考え方 |
| ③数学的な技能 | ④知識・理解 |
| 3 パフォーマンス課題について | |
| 重点目標 | 身に付けさせたい知識・技能 |
| パフォーマンス課題の内容 | 指導方法・形態 |

パフォーマンス課題のルーブリック

| | | |
|------------------------|-----|---------|
| 4 | 観点1 | 観点2 |
| 5 | | |
| 4 | | |
| 3 | | |
| 2 | | |
| 1 | | |
| 5 育成したい能力(キャリア教育の観点から) | | |
| | ○○カ | |
| | ○○カ | |
| | ○○カ | |
| 6 授業計画 | | |
| 時数 | 小単元 | 学習内容・活動 |
| | | ① ② ③ ④ |
| | | 評価方法 |

研修を実施した6教科のアンケート結果を集約したところ、ほとんどの受講者が「満足である」「だいたい満足である」と回答していた。受講者の感想からも、多様な評価手法に関する理解が深まったことや、目標設定、単元構想の大切さを実感したことなどが分かり、多様な評価を実施することの必要性を多くの教員に伝えることができたと感じている。

(3) 小冊子の作成

(1)の研究校における実践の考察を基に、各学校の指導と評価の充実に向けて、どのような資料を作成すべきかを協議した。最初に、全ての教科に共通する内容を検討したところ、教科指導におけるPDCAサイクルの確立が挙げられた。最も重要な内容であるので、冒頭に掲載することとした。次に、パフォーマンス評価に関しては、まだ馴染みが薄いので、関連用語の解説をQ&A方式で作成することとした。さらに、各教科の特性を踏まえた単元構想やパフォーマンス課題・ルーブリックの作成、

主体的・協働的な学習活動についても重要な内容であるので、教科ごとにまとめることとした。そして、研究校の実践で明らかになったさまざまな成果と課題を基に、指導と評価の充実を図る上での留意事項をQ&A方式で作成することとした（資料参照）。

5 研究のまとめと今後の課題

本研究に関わることにより、教科指導において、学習評価を授業の改善につなげることの重要性に改めて気付くことができた。このことを多くの学校の先生方に伝えたいと強く感じている。

今後も、各学校における指導と評価の充実に向けて、よりいっそう研究を深め、普及・還元に努めてまいりたい。

参考資料

愛知県教育委員会『高等学校における多様な学習成果の評価手法に関する調査研究 研究成果報告書』
（平成 25 年度～平成 27 年度）